



1「子ども番楽教室」には現在、小学生4人と中学生7人が在籍。指導は山内番楽保存会の皆さんが行っています。この日の練習は畠山さんと嶋森良憲さん(33歳・下山内、写真右手前)、小林進さん(84歳・下山内、写真右奥)が担当。2畠山さんの父・耕之助さん(91歳・上山内)。87歳のころ、番楽の舞を書き記した教科書を作り上げました。3耕之助さんが作った教科書は全12冊。舞の作法、太鼓を叩くタイミングなどが詳細に書かれています。

### 同志たちの存在が 大きな力に

そう感じる時にこそ、「自分の舞ったものは責任を持って次の世代へ継承していく」という思いに立ち返り、自分自身を奮い立たせています。私の父親もその思いは同じで、数年前に、番楽の舞の動きを絵で表し、太鼓を叩くタイミングなどを記した「番楽の教科書」を作り上げました。また、私たちが現在指導を行っている子ども番楽教室の生徒たちが一生懸命番楽に取り組む姿を見ている

と、希望と活力が湧いてきます。昨年11月には、4人の新しいメンバーが入ってきてくれてとても嬉しかったです。その4人を含め、教室の生徒たちが競演会で舞を披露した姿はとても立派でした。「番楽を守りたい」という気持ちは、多くの方が心に抱いているものだと思います。私としては、もっとたくさんの方の舞を次世代に伝えていきたいという思いもあるので、体力が続く限り番楽を続け、伝統の舞を守り継げるようこれからも頑張りたいです。



平成28年の番楽競演会で19年ぶりに披露された舞「鐘巻」。畠山さん<sup>⑥</sup>は、大蛇を退治する山伏を演じました。

500年以上にわたって受け継がれてきた五城目の番楽。その過程では、伝統芸能を次世代につなげようと取り組む方々の思いや努力がありました。現在も舞手を務め、その伝承に力を注ぐ畠山安博さんに番楽への思いを伺いました。

### 世界で舞った 誇り高い町の伝統芸能

私は、小学校5年生のころから番楽に取り組み、父親や山内番楽の皆さんに教わりながら舞を覚えてきました。番楽の練習は、夜になると家の近くの公民館で行われ、そこで見つちりと舞を叩き込まれました。

当時は、私たちのほかに西野、中村、恋地の3つの保存会があり、「お互いに負けられない」と、ライバル意識を持って練習に取り組んでいました。ですので、練習はもちろんですが、競演会当日もとても気合が入りました。

私が住む山内地域では番楽が当たり前になっていますが、地域外の方々の目には新鮮に映り、すごく印象に残るそうです。なので、「番楽を披露してください」という依頼は

一度も断らず、様々なところで舞を披露してきました。

海外で公演を行ったこともあり、ニューヨークのカーネギーホールやタイ王朝の式典の場などの大舞台も経験しました。お客さんがたくさんいるとやりがいがありますね。そして今もこうして、世界で舞った番楽を続けられていることに誇りを感じています。

ですが、その思いとともに危機感も抱いています。番楽の舞は、「形の無いもの」で、守り継ぐには人から人へ伝えていくしか方法がありません。そんな中、町で現在も活動を続けているのは私たち山内番楽保存会のみとなっています。私も含め、舞手が高齢化していることもあり、時には「このままでは全ての舞が途切れてしまうのではないか」と不安に感じることもあります。



### 山内番楽保存会 畠山 安博さん

山内番楽保存会の会員として今も現役で舞い手を務め、今年の競演会では「山の神」を熟演。また、子ども番楽教室での指導も行う。上山内在住。68歳。

## 伝統の新たな守り手たち

競演会終了後、初出演となった4人に感想などを聞きました。

〇〇 〇〇さん (五城目小4年)

初めての競演会はお客さんがたくさんいて緊張したけど、今までで一番うまくできました。番楽はいろいろな動きがあって楽しいです。



〇〇 〇〇さん (五城目小4年)

番楽の動きの中でいちばん好きなのは、思いっきり上にはねるところ。練習では間違いがいっぱいあったけど、本番では完璧にできました。



〇〇 〇〇さん (五城目小4年)

教室では、先生たちが丁寧に教えてくれるので楽しい。競演会では、たくさんのお客さんの前でうまくできました。来年もがんばります。



〇〇〇〇〇さん (五城目小4年)

今の中学1年生のみんなと一緒に遊びながら番楽を覚えました。伝統ある舞台上で番楽を舞うことができてとても楽しかったです。